

## 2pF06 分子同定に基づくフデリンドウと菌根菌の対応関係の解析

野島 大志<sup>1</sup>, 中井 静子<sup>2</sup>, ○横山 潤<sup>3</sup>

(<sup>1</sup>東北大・院・生命科学, <sup>2</sup>日本大・生物資源, <sup>3</sup>山形大・理・生物)

菌根共生系は、陸上植物の大部分が依存している菌類との重要な共生系の一つである。しかし一部の植物群では、必要な栄養源供給を全て菌に依存する菌寄生植物が進化している。ラン科やツツジ科の菌寄生植物については、混合栄養植物についての研究も含め、菌根菌との関係の変化に伴う顕著な寄主転換が明らかとなっている。しかし、他の植物群では広範囲な栄養摂取様式のスペクトルに対する菌根菌との対応関係の研究が十分に進められていないのが現状である。そこで本研究では、独立栄養性から菌寄生性まで、アーバスキュラー菌根菌に対して様々な依存度を示す種を含むリンドウ科植物の中で、混合栄養性であると考えられるフデリンドウ *Gentiana zollingeri* を対象に、分子同定に基づいて菌根菌相を明らかにした。また、得られた結果を既に報告されているリンドウ科植物の菌根菌相と比較した。東日本の8ヶ所からフデリンドウを採集し、18srDNAの部分塩基配列に基づいて菌根菌を同定したところ、いずれも *Glomus* group A に属する広範囲のアーバスキュラー菌根菌が得られた。しかしその中でも *Glomus aureum* およびリンドウ科菌寄生植物 *Voyria* の菌根菌と単系統になる菌が多く得られ、アーバスキュラー菌根菌に対するある程度の選好性を示すことが明らかとなった。